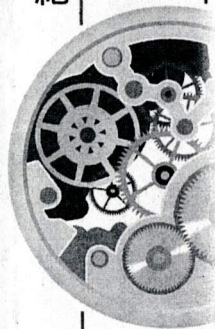


# 越境精神

小長谷 有紀



## 梅棹忠夫の残したもの

10

梅棹忠夫は65歳のとき突然、失明した。にもかかわらず、その後3年の間に口述筆記によって40冊を著わした。失明後によつやく執筆時間を確保した、といったほうがよいだろう。当時、「月刊梅棹」と称せられていた

いる（『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』より）。未刊に終わった『人類の未来』の編集を担当した小池信雄氏は、一向に執筆が進まない理由書を会社に提出しなければならなかつ

# 訓練で獲得した文才

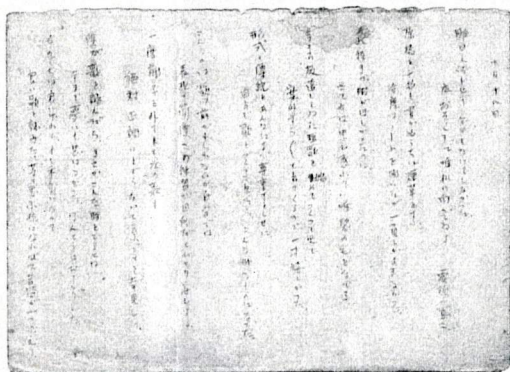
が、月刊以上に高速だった。

すらすらと読みやすい文章だから、さらさらと簡単に書かれたように思われるかもしれない。しかし、梅棹は総じて、どちらかといえば遅筆のほうだった。こゝつもの証言がある。

例えば、梅棹自身、『知的生産の技術』のなかで、「ある作家の作品のなかに、只棹埋男翁という老学者がでてきて」、原稿の締め切りがきても書けないので苦しんでいると、夜中にキツネがとりついて、たちまち文章ができあがる、と描写されていることを紹介している。小松左京の『地図の思想』に所収された「野と水」の章に、くだんの翁は登場する。翁といっても梅棹が44歳の頃である。

『知的生産の技術』の編集を担当した小川壽夫氏は、水洗便所の使い方を来客にひらがな2行で示すために苦悶していた、と記して

## 65歳 突然の失明



残されたスケッチブック。20歳で初めて挑戦した和歌が記されている

た。それによれば、「研究所から七時ごろ帰宅し、食事。自室へ入り、原稿を書くべく机へむかうのは、十時。それから四時くらいまでおきている。しかし、翌日があるので、なるべく四時にねるようにしているが、原稿が書けはじめ調子にのるのが、そのくらいの時刻なので、つねに中断しなければならぬ。しかも、興奮したまま床に入るので、寝つかれない。ねむるためにお酒をのむ。つい度をすぎす」

文章のスタイルが人それぞれであるように、書き方のスタイルも人それぞれであつていい。夜中に沈静して書く人もいれば、朝方に覚醒して書く人もいる。天性の文才に恵まれている人もいれば、そうでない人もいる。そうでない人のほうが多いだろう、きっと。梅棹もまた、考えをまとめるのに苦労したからこそ、文才は後天的に獲得できると確信していた。「才能より訓練」だと書いた。

梅棹アーカイブズに残されたスケッチブックのなかに、20歳の頃、初めて和歌に挑戦したさまが記されている。まったく字あまりなため、とても和歌とは思えない。例えば「こんなのは歌以前かもしれないが、自分では、表現の簡素さの練習が目的だとひとり安心する」。

型にはまらず、型を破る。それでも、型があることを否定せず、己の訓練にいそしんだのだ。 (国立民族学博物館教授)